1 神話から哲学へ ―自然哲学者たち

▶ pp.24～27

アルケー ―自然哲学の祖タレス

タレスは万物の始元を水であるとした。そして世界は生きた（生命をもつ）ものであり，神々（ダイモーン）に充ち満ちているとした。また彼は，一年に四季の区別を見出し，一年を三百六十五日に分けたと言われている。〔……〕

彼はあるとき，星を観察するために，老婆を伴って家の外に出たが，溝に落ちてしまった。そこで大声で助けを求めたら，その老婆はこう答えたというのである。「タレスさま，あなたは足下にあるものさえ見ることがおできにならないのに，天上にあるものを知ることができるとお考えになっているのですか」と。

（ディオゲネス・ラエルティオス，加来彰俊訳『ギリシア哲学者列伝』（上）　岩波文庫）

2 知と徳をめぐる問い ―ソクラテス

▶ pp.27～31

無知の自覚

私は，知恵があると思われている人の一人を訪ねました。可能ならそこで神託を論駁して，神の託宣に対してこう示そうと思ったのです。

「この人が私より知恵ある者です。あなたは，私がそうだ，とおっしゃったのですが」と。

そこで，その人をよく吟味しながら――名前を挙げてお話しする必要はないでしょうが，政治家の一人でした――その吟味で次のような経験をしました。アテナイの皆さん，その人と対話をしていて，私にはこう思われたのです。

「この人は，他の多くの人間たちに知恵ある者だと思われ，とりわけ自分自身でそう思いこんでいるが，実際はそうではない」と。……

私は帰りながら，自分を相手にこう推論しました。

「私はこの人間よりは知恵がある。それは，たぶん私たちのどちらも立派で善いことを何一つ知ってはいないのだが，この人は知らないのに知っていると思っているのに対して，私のほうは，知らないので，ちょうどそのとおり，知らないと思っているのだから。どうやら，なにかそのほんの小さな点で，私はこの人よりも知恵があるようだ。つまり，私は，知らないことを，知らないと思っているという点で」と。

（プラトン，納富信留訳『ソクラテスの弁明』光文社古典新訳文庫）

よく生きること

ソクラテス　愛する友よ，して見るとわれわれは多衆がわれわれについていうことをあまり気にせずに，ただ正と不正の専門家が，あの一人だけが，そうしてまた真理そのものが，いうことを顧慮（こりょ）しなければならないわけだね。すると第一に君の主張で正しくないのは，正や美や善やその反対に関して，われわれは多衆の意見を顧慮しなければならないといったことである。だが，しかし多衆はやっぱりわれわれを殺すことができるのだよ，といって抗議する人があるかも知れないね。

クリトン　それももちろん明らかだ，ソクラテス，きっとそういって抗議する者もあるだろうよ。

ソクラテス　君のいうことはもっともだ。が親愛なる者よ，それでもわれわれが今述べた主張は従前同様に妥当だと僕には思われる。それから次の事も考えなおして見てくれたまえ，一番大切なことは単に生きることそのことではなくて，善く生きることであるというわれわれの主張には今でも変りがないかどうかを。

クリトン　むろんそれに変りはない。

ソクラテス　また善く生きることと美しく生きることと正しく生きることとは同じだということ，これにも変りがないか，それともあるのか。